

【作文】 小学生の部

「ぼくのお姉ちゃん」

大原小学校五年 岩島 琥次朗

ぼくには、二歳年上のお姉ちゃんがいます。ぼくのお姉ちゃんには、しょうがいがあります。重度の脳性まひです。ねたきりなので、立ったり歩いたりすることができません。ご飯は「いろう」というおなかについたチューブから食べます。こきゅうは、気管切開というのどに空いた穴からします。こきゅう器を使うこともあります。つばを飲みこむことができないので、きゅう引器でつばやたんを取ります。体が弱いので、小さいときから今までにたくさん入院をしてきました。でも今は、養護学校へ毎日元気に楽しく通っています。そして、毎日元気にすごすために、訪問診りょうや訪問かんご、訪問リハビリといったたくさんの人たちが、ぼくのお姉ちゃんを支えてくれています。

ぼくは夏休みに旅行でアウトレットに行きました。お母さんとお父さんがお姉ちゃんを見ておかないといけないので、大変でした。お昼はフードコートに行きました。そこにはお姉ちゃんと似た人がいました。その人は口からご飯を食べていました。ぼくのお姉ちゃんとはちがうけれど、同じしょうがいのある人も買い物に来ていたので、おどろきました。

買い物の中で、小さい子がじろじろぼくたちの方を見てきました。ぼくは、お姉ちゃんが何かをしたのかなと思いました。でもそう

ではなくて、みんなとちがうしょうがいがあるからだと思いました。そのときにぼくは「イヤだ」と感じました。ぼくのお姉ちゃんはみんなと同じ人間です。だから、じろじろ見られたくないと思ったのです。でも、お姉ちゃんはぼくとちがいが、しょうがいをもっています。だからこそ、みんなにはじろじろ見ないでほしいと思いました。

世の中にはしょうがいをもった人が、ぼくのお姉ちゃん以外にもたくさんいます。目が不自由な人、歩けない人、話すことができない人など、お姉ちゃんとちがうしょうがいをもっている人もいます。

ぼくのお姉ちゃんはどうしょうがいがあるけれど、みんなと同じ人間です。みんなと同じ権利がお姉ちゃんにもあることが、この二日間の旅行でわかりました。お姉ちゃんと旅行に行つて、良い思い出になりました。だから、これからもつとお姉ちゃんと旅行に行けるように、しょうがいのある人でも楽しいことができるようなバリアフリーのしせつがふえると良いなと思いました。そうすれば、しょうがいのある人たちとたくさんお出かけができるようになります。今はバリアフリーではない所もたくさんあるし、じろじろ見てくる人もたくさんいるけれど、ぼくはこれからお姉ちゃんとたくさんお出かけをして、しょうがいのある人が当たり前にお出かけできる世の中にしていきたいと思います。

【作文】 小学生の部

「自分らしく生きる」

山東小学校六年 細井 佳歩

みなさんは毎日「自分らしく」過ごしていますか。私はみんなが「こうだから」という理由でみんなに合わせて自分の意見が言えなかったり好きなことが言えなかったりしたことがあります。

一見するとこれは私の性格やコミュニケーション力の問題で人権に関係がないと思うかもしれませんが。しかし本当にそうなのでしょうか。私はそうは思いません。「自分らしく生きる」というのは、自分の「好き」や「やりたい」という気持ちを、まわりに気をつかわずに言えることだと思います。みんなに合わせていると、ケンカは起きないし、その場はうまくいくかもしれないです。ですが、ずっと自分の気持ちを隠していると、話していても楽しくないし、自分の気持ちと言えなくてもやもやします。みんなに合わせていると、自分の意見を言わなくていいので、ラクなときもあります。しかしそれは、自分で考えるのをやめてしまっているのと同じではないでしょうか。私は、自分の意見を持つことや、自分の個性を出すことは、自分らしく生きるためにとっても大切なことで素晴らしいことだと思います。私たちは、一人ひとり違う人間です。みんなが同じ色になる必要はなくて、赤が好きな人がいれば、青が好きな人がいてもいいはずです。みんなと違うことは、恥ずかしいことでも、悪いことでもありません。自分の「好き」を堂々と言えることこそが、本当に自分ら

しく生きているということなのだと思います。もちろん、自分の「自分らしさ」を大切にするためには、友達の「自分らしさ」も同じように大切にしなければいけません。みんなが「私はこれが好き!」「あなたはそれが好きなんだね」と言い合えるクラスや学校になったら、毎日をもっと楽しくなると思います。そのためには友達の「自分らしさ」を大切にすることで意見が言い合える、素敵な楽しいクラスや学校になり楽しい学校生活が送れると思います。

自分の意見が言えて素敵なクラスになるために私は、友達の好きなこと自分の好きなものをしっかりと認めること、自分の意見をしっかりと考えて発言することが必要だと思います。人はそれぞれ考え方も好きなことも違うので自分の好きなことを自分の意見を言える自分の意見を言っても否定されないそんなクラスを作りたいです。

【作文】 小学生の部

「決めつけない」

坂田小学校五年 吉川 絢菜

私は、五月に家族で初めて台わんに行きました。海外旅行は初めてだったので、楽しみな気持ちとときどきする気持ちがどちらもありました。なぜ、私がときどきしていたかというと、「海外は日本と比べてきたない。」「日本語が通じなくて困りそう。」「という印象があったからです。道にごみがたくさん落ちていたり、外国語が話せないと旅行先で楽しめなかったりすると思っていました。けれど、実際に行ってみると、きれいで安心しました。

台わんでは、映画『千と千ひろの神かくし』に出てくる景色で有名な、九ふんという名所に行きました。私は、映画のぶ台になった場所に行くことを、とても楽しみにしていました。九ふんには、ツアーで行きました。ツアー客は、全員日本人でした。そこで出会ったのが、ツアーガイドのチンさんです。チンさんは、日本語がとても上手で、初めて会った私たちに、やさしく声をかけてくれて安心しました。ツアー客が好きそうな場所を教えてください、私の弟の体調を気にかけたりしてくれたので、とても親切な方だと思いました。バスの中でも、チンさんは、九ふんについていろいろなことを教えてくれました。九ふんは、映画で有名な場所ということしか知らなかったけれど、昔、金が採れて、たくさんの人が住んでいた歴史的な場所だということが分かりました。チンさんの話を聞いて、他の場所でも

金が採れたのが気になり、調べてみたいと思いました。チンさんは、日本の文化についてもよく知っておられて、とてもおどろきました。チンさんとの出会いによって、台わんという場所のイメージが変わり、海外が楽しいイメージの場所になりました。

そして、私はあることに気がつきました。私が台わんについてあまりよくない印象をもっていたのは、台わんのことをよく知らなかったからだということです。もし私が、今年台わんに行っていないのなら、インターネットの情報だけを信じて、「外国はきたない」と判断していたと思います。そして、その考え方は、人についても同じなのではないかと考えました。

例えば、見た目が自分とちがったり、障がいがあったりするからといって、その人のことをある考えで決めつけてしまうことがあると思います。しかし、この経験をきっかけに、人を見た目で判断せずに、実際に話してみたり一緒に遊んでみたりすることで、相手がいかに人かが分かってくると思いました。

私は今まで、台わんのイメージのように、周りの人や物事について決めつけてしまうことがありました。相手を知ろうとせずかんちがいしていたら、本当のことが分からず、もったいないと思います。これからは、始めから決めつけずに、実際に見たり聞いたり、そして話したりすることで、相手のことを知っていききたいです。